

| | |
|---------|--|
| 事業名称 | meet the artist 2022 : メディアとしての空間をつくる |
| 事業主体名 | 公益財団法人山口市文化振興財団 |
| 連携先 | 株式会社砂木、有限会社かしわ製作所、山口市役所、創造系不動産株式会社、金子美和、鈴木康義、藏菌悠介ほか |
| 対象地域 | 山口県山口市 |
| 事業概要 | 空き家を、劇場や美術館などの既存の公共文化施設の活動を多面的に補完するオルタナティブスペースへと転換することで、新たな空き家の利活用モデルはもとより、新たな文化振興のモデルを構築し、発信する。令和3（2021）年度は調査のみで、令和4（2022）年度はスペースの運営を行う。 |
| 事業の特徴 | 公共文化施設が持っているリソースを活用したオルタナティブスペースの設立、運営を通じた空き家解消を提案する。また設計から改築、スペース運営におけるトップダウン的ではないプロジェクトの進め方によるプロジェクトメンバーのオーナーシップの醸成。多種多様なイベントを70件以上開催、さらに映像やwebなど様々なメディアによる情報発信を行った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・物件の調査 ・物件の改築 ・プロジェクトチームの運営 ・イベントの開催 |
| 成果の公表方法 | 山口情報芸術センター [YCAM] でのイベントやウェブサイトを通じて公開 |
| 今後の課題 | 物件を中心としたプロジェクトメンバーの構築や空き家の利活用の方法の実践を行うことができたが、物件周辺のエリアに対しての効果の分析の明瞭化、プロジェクトメンバーの外周に存在するプロジェクトビューアーの参画の方法が課題としてある。 |

1 . 事業の背景と目的

本事業は、山口県山口市をフィールドに、空き家を、劇場や美術館など既存の公共文化施設の活動を多面的に補完するオルタナティブスペースへと転換・運用することで、新たな空き家の利活用モデルはもとより、文化振興の新たなモデルを構築し、発信するものである。令和3（2021）年度は調査を実施し、令和4（2022）年度においては実際に物件を取得しイベント開催などのスペースの運営を実施した。

空き家対策はこれまで、まちづくりや生活環境の保全といった観点から、都市計画に関わる部署が担当する場合が多かったが、本事業では地方自治体に設置されている公共文化施設をハブにしながら、文化行政の視点も空き家対策に加えていくことを企図している。

なお、本事業主体である公益財団法人山口市文化振興財団は、山口県山口市内の複数の公共文化施設を管理・運営しており、そのなかのひとつ山口情報芸術センター [YCAM] は美術館や劇場、映画館などの機能を持った複合型の文化施設である。

制度化から未分化へ

1960年代以降、アートシーンで発表される作品が、不定形かつ脱領域的でサイトスペシフィックな傾向を示すようになってきた。美術館は展示機能の強化や、劇場や映画館など他の制度的空間との複合でこれに対応している。一方で、芸術祭の興隆とともにその傾向はより強まり、むしろ特定の用途に特化しないオルタナティブスペースの重要性も高まっている。オルタナティブスペースは、作品ごとに求められる設えが変わるため、住居や倉庫、廃校などの既存の物件を期間限定で改修し、実現することが多い。

これまでの行政の文化振興は美術館などの制度的空間の整備・維持が中心で、また近年は芸術祭などの開催に軸足が移ってきたが、予算の減少、コロナ禍もあり、大きな転換点に差しかかっている。今後は、地域資源を活用しながら、オルタナティブスペースを創出し、ネットワーク化する取り組みが増えると思われる。

文化行政と都市機能整備の融合

文化行政は、上記の芸術祭の興隆とともに、行政における観光振興を担当する部署との連携を深めている場合が多いが、空き家対策を始めた都市機能整備に関する部署との連携はまだ弱い。しかし、上記のような傾向を考えると、空き家対策は文化行政が主導する大型イベントをさらに活用するべきであるし、文化行政側もその活動が間接的に空き家問題の解消に影響を与えうるという可能性を自覚するべきである。公共文化施設は日本各地に点在しており、その芸術文化に関する予算が減少しているとはいえ、そのリソースやネットワークは依然として強固なものがある。本事業を通じて、今後ほかの地域の公共文化施設でも同様の取り組みが広がれば、新たな空き家対策のアプローチになるだろう。

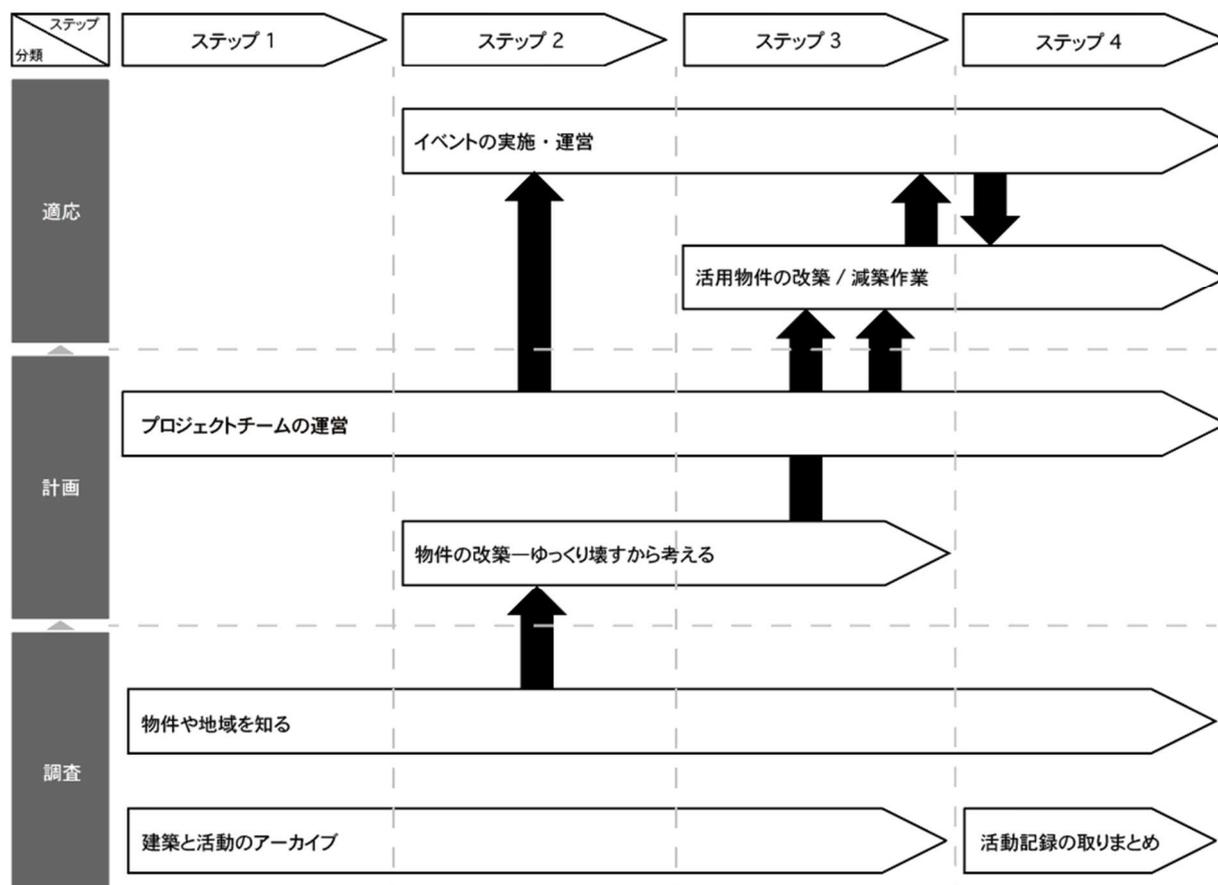
市民参加型の設計 / 改築によるオーナーシップの醸成

一般的に改築 / 減築はある利用方法や目的があって、そこに向かって建築家や職人などの専門家が半ばトップダウン的に進める場合が多い。オルタナティブスペースのようなイベントスペースであってもそれは例外ではなく、一定のルールや専門性が求められるため、そのようなプロセスで進められる場合がほとんどである。しかし、そのようなプロセスを採用することが、地域社会や、潜在的な利用者を疎外し、スペースに対するオーナーシップを低下させてしまっている側面が否めない。事業主体の山口情報芸術センター [YCAM] は、2003年の開館前後に「ハコモノ行政」との批判をうけ、大規模な反対運動にまで発展した苦い経験を持つ。先端的な事業内容に対する理解が得られなかったことが大きな要因であるが、それは地域社会や利用者がオーナーシップ、つまりこの施設が自分のものであるという実感を得られなかったと言い換えることもできるだろう。オーナーシップを獲得するためのアプローチとして、大規模公共施設の設計時におけるワークショップの代替として、小規模なオルタナティブスペースだからこそできるオーナーシップの醸成方法を確立できれば、長期的なオルタナティブスペースの運用に繋げられるだろう。

2. 事業の内容

(1) 事業の概要と手順

令和4 (2022) 年度のフロー図



役割分担図

| | 取組内容 | 具体的な内容 | 担当者 (組織名) | 業務内容 |
|-------|----------|---|---|---|
| 令和4年度 | 物件の取得 | <ul style="list-style-type: none"> ・契約書の作成 ・物件契約 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・創造系不動産 | 昨年度作成した物件調査シートを参考に物件を選定。取得に向け契約書の制作、所有者と契約締結。 |
| | 物件や地域を知る | <ul style="list-style-type: none"> ・活用物件の図面作成 ・井戸調査 ・住宅医診断 ・簡易的な構造診断 ・アスベスト診断 ・造園家による樹木判定 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・各業者 ・鈴木康義 | 取得物件の活用に向けて、業者に依頼し各種調査を実施、そのとりまとめ。 |

| | | | | |
|-------------------|---|---|---|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・建築家による現地調査 ・インフラ系現地調査 | | |
| 建築と活動のアーカイブ | <ul style="list-style-type: none"> ・建物3Dデータの作成 ・フォトグラメトリーの作成 ・古材廃材の保管 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・株式会社砂木 ・京都芸術大学 ・プロジェクトメンバー | 物件建設当時の建築技術や社会経済状況など復元的に考察することができる資料の作成。 | |
| プロジェクトチームの運営 | プロジェクトメンバーの募集 メンバーミーティング | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・プロジェクトメンバー | スペースを運営するプロジェクトメンバーの組織。 | |
| 物件の改築—ゆっくり壊すから考える | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップの実施 ・設計プランの作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・株式会社砂木 | ワークショップで収集したアイデアを元に活用物件の改築プランを構築。 | |
| 活用物件の改築/減築作業 | <ul style="list-style-type: none"> ・インフラの整備 ・工務店による現地調査 ・現場管理業務 ・改築/減築作業 ・改築/減築作業の補助 | <ul style="list-style-type: none"> ・有限会社かしわ製作所 ・プロジェクトメンバー ・藏園悠介 | 専門業者の管理のもとプロジェクトメンバー共同で改築/減築作業を実施。さらに持続的にスペースとして活用するためインフラの整備。 | |
| イベントの実施・運営 | <ul style="list-style-type: none"> ・トークイベント ・作品展示 ・映像上映・コンサート ・演劇 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・プロジェクトメンバー ・金子美和 ・松富淑香 | 活用物件で開催されるイベントの企画制作、運営。 | |
| 活動記録の取りまとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・イベントレポートの作成 ・記録写真 ・webサイトの更新 ・映像記録の作成 ・マニュアルの作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口情報芸術センター [YCAM] ・谷康弘 ・仲本拓史 ・藏園悠介 | 各種イベントにまつわる、映像・写真記録、レポートの作成を行いwebサイトにアップロード。本プロジェクトのドキュメント映像の作成、マニュアルの作成。 | |

(2) 事業の取組詳細

物件の取得—旧金子邸

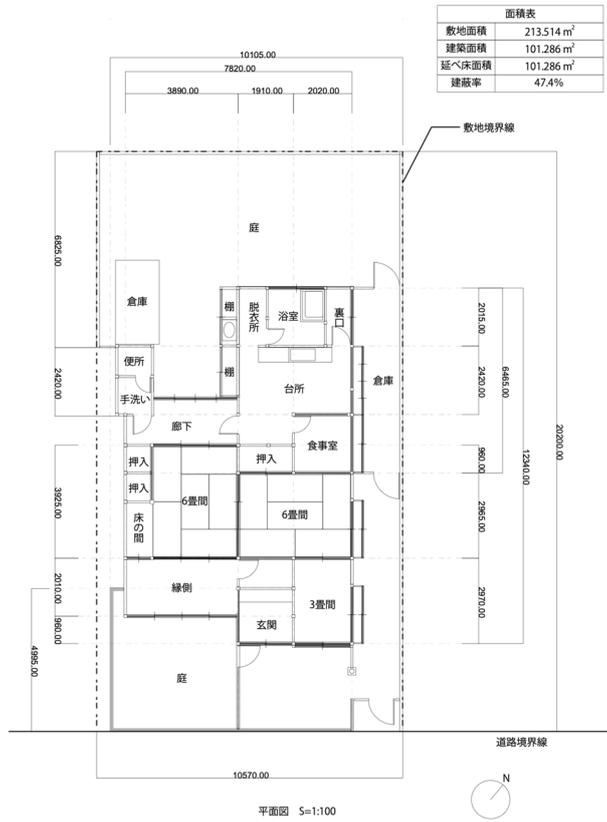
山口県山口市の中心部になる中園町の推定築年数85年の物件（本事業では「旧金子邸」と呼称）を取得し、事業を展開した。この物件は、10年にわたって居住者がおらず、散発的に使用していたものの、老朽化が進んでいる物件である。

山口市は前年度の調査結果でも指摘したとおり、全国平均よりも高い水準で空き家率が推移しており、中園町のような中心部であっても歴史的経緯から空き家が多い。所在地の区域区分としては非線引き都市計画区域、用途地域としては第2種住居地域にあたり、中心部にあたる湯田温泉駅や山口駅の双方に近く、利便性が高いエリアに所在する。物件の前には、山口県と島根県西部を結ぶ旧石州街道が通り、周辺にはかつては職人や商人が多く住み、町屋・長屋型の建物が多く建っていたようだが、現在は戸建住宅やアパートに変化していき、様々な建築が入り乱れている。また2003年には所在地から徒歩5分の場所に山口情報芸術センター〔YCAM〕がオープンし、その近接性から、機材や人的リソースなど、イベントスペースの運営に必要なリソースを容易に転用することができるというメリットもある。

最終的には所有者側の事情から不動産業者を介さず、所有者との直接交渉により、借主側の判断で大幅な減築が可能な特殊な賃貸という形式で取得している。建物の一部が老朽化により居住に適さない部分があり、建物にはもはや不動産価値はないため、不動産市場で流通する場合は、本事業で着目していた「古屋付き売り土地」として流通している物件である。



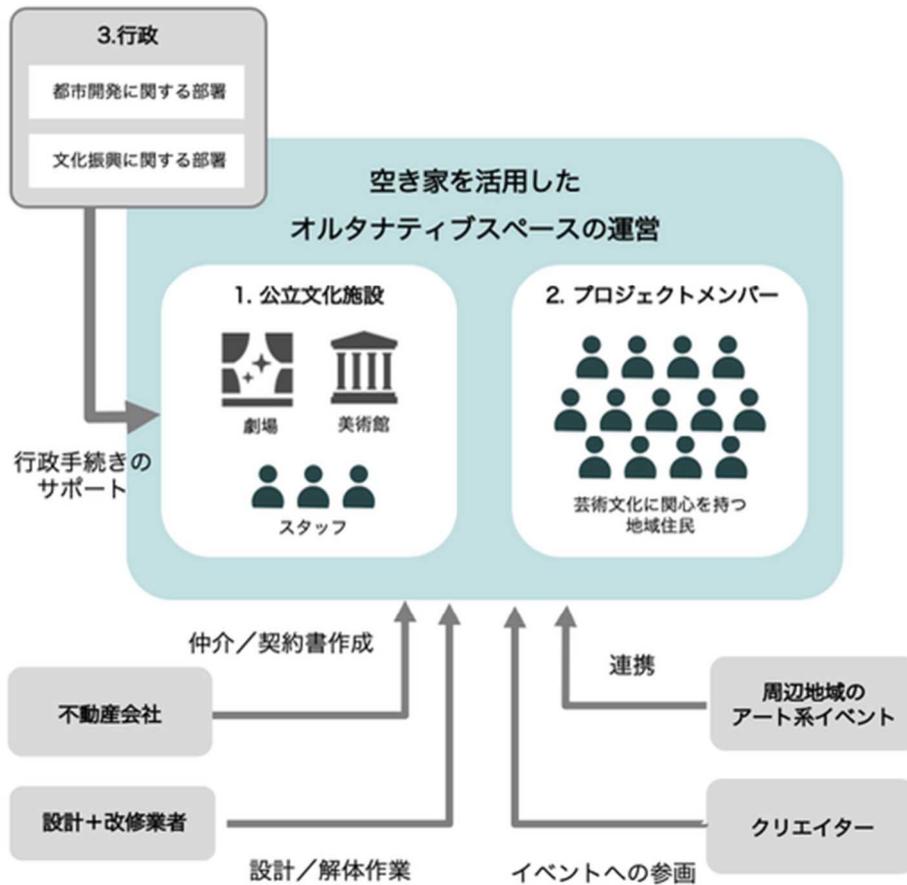
建物の外観



図面

| | |
|------|--------------------------------|
| 地域 | 市街化非線引き区域・第2種住居地域 |
| 建ぺい率 | 60% |
| 容積率 | 200% |
| 主用途 | 専用住宅築85年(1930年代) |
| 規模 | 木造平屋建て、本瓦葺き |
| 敷地面積 | 213.514m ² (64.59坪) |
| 建築面積 | 101.286m ² (30.64坪) |
| 延床面積 | 101.286m ² (30.64坪) |

プロジェクトチームの運営—市民との協働で作り出すオルタナティブスペース



山口市民を中心としたプロジェクトメンバーを編成し、イベントの企画制作や建物の改築の管理など、オルタナティブスペースの運営を担った。プロジェクトメンバーは、10代から70代までの約60名。フリーター、地元の大学生、主婦、地元の事業者、山口情報芸術センター [YCAM] のボランティア団体に所属している者など、様々な属性のメンバーから構成されているが、概ね空き家問題や文化的なイベントに関心を持つと

いう共通点がある。事業の実施の過程においても、イベントの開催などを通じて、プロジェクトメンバーの募集を行うなどし、常に門戸を開き、メンバーの拡大や、流動性の確保に努めていた。また、危険を伴う解体作業など専門的な作業領域については、建築家や職人など**様々**な専門家組織が分担している。

協働を通じて、物件や地域を知る

スペースの運営と並行して、建物ならびに所在地についての調査を実施した。

本事業は、オルタナティブスペースとして利用するため、主要構造部におよぶ建物の改築を実施したため、先立って建物の安全性の確認や、多岐にわたるジャンルのイベントに対応可能にするためのインフラ整備が必要となる。そのため**様々**な専門家による調査が行われたが、その調査の様様や、調査結果のプレゼンテーションをオープンなイベントとして実施し、プロジェクトメンバーをはじめとする空き家問題に関心のある地域社会の人々に知識を共有する機会とした。また、地域の調査については、参加型の街歩きイベントも開催し、非専門家による分散型の調査も導入した。

例1 レクチャーシリーズ：金子邸とはなんだったのか

物件を活用する前段の予備調査に伴い、**様々**な分野の専門家が訪れる。ごく一般的な住宅であるこの物件から、どのような知識や経験、特徴を引き出すことができるのか。

庭師や大工、埋蔵文化財の専門家などを迎え、この物件を通じて専門的な視点を開くことで、プロジェクトメンバーをはじめとする参加者の空き家に対する理解度の向上を図った。



金子邸とはなんだったのかvol.1：田尻裕樹（住宅医）

2022年7月13日



金子邸とはなんだったのかvol.2：伊藤尚吾（庭職人）

2022年8月26日

例2 ウィキペディアタウン山口

オルタナティブスペースの運営には、立地する地域が持つ歴史的、文化的コンテキストへの理解が必要となる。山口情報芸術センターには市立図書館が併設されていることから、昨年度に引き続き「ウィキペディアタウン」を開催。フィールドワークと文献調査を組み合わせ、旧金子邸が立地する山口市中国町周辺の情報をまとめ、ウィキペディア上にアップロードしていった。

その後はプロジェクトメンバーの有志が自律的に周辺情報を調査し、継続的に中国町の周辺の情報をウィキペディア上にアップロードする活動を続けている。



第2回 ウィキペディアタウン山口



プロジェクトメンバーが作成した中園町に関する記事

例3 レクチャーシリーズ：空き家の見方調べ方

本事業で使用している物件を題材に、不動産と建築の両面から空き家の特性を捉えるレクチャーを行った。空き家問題の概況を把握しながら、建築図面や不動産資料、謄本といった専門性が高い資料の読み解き方や、空き家の現地調査で確認すべき事柄など、空き家の利活用するうえで絶対に押さえておきたいポイントを、実例を交えて明らかにした。



空き家の見方・調べ方中園町編

物件の改築—ゆっくり壊すから考える

本事業においては、空き家から特定の用途に特化しない**様々**な空間のバリエーションを生み出し、かつ市民も設計や改築のプロセスに参画できるようにする方法論として、「ゆっくり壊す」というアプローチを採用した。これは、一般的には見られない長さの時間をかけて、つまり重機などをなるべく使わずに建物の解体や

改築を実施することで、一連の作業を効率性や専門性から解放するもので、ゆっくりと変化する空間から様々な利活用のアイデアを抽出することを可能にするものである。

本事業の建築設計面での連携団体である株式会社砂木は、ヴェネツィアビエンナーレ日本館（2021年）や「新建築社小豆島ハウス」（2022年）など、使われなくなった民家を利活用したプロジェクトを多く手がけており、同社と連携しながら、活用と共存可能な解体の手順を検討。この過程ではプロジェクトメンバーが参加するワークショップを開催し、建築物に関する基礎的な知識を共有したうえで、建物が持つ歴史や思い出や、利活用のアイデアをボトムアップ的に収集。そうしたアイデアも解体に取り入れている。建物の部分的な解体・改築を行うことで生まれた変化を、イベントに活用する流れを作った。



利活用のアイデアを抽出するイベント「ゆっくり壊すを考える」



解体の様子

例1 風呂場の茶室&ステージ化

風呂場の解体の過程で一時的に巨大な開口部が生まれたため、そこに畳を敷き、茶室と見立て茶会を開催したり、ステージと見立ててコンサートなどを開催した。



例2：居間のホール化

居間の解体の過程で、床と天井板を抜いたことからステージと客席を持ったホール状の空間が一時的に生まれたため、そこにプロジェクターと4m×3mのスクリーンなどを設置。映画の上映会や、映像を用いたライブコンサートなどを開催した。



イベントの開催

本事業においては、改築によって生み出された**様々**なバリエーションの空間を利用して、多種多様なイベントを70件以上開催し、1000名程度の来場があった。イベントは山口情報芸術センター [YCAM] がノウハウのある展覧会や公演、トークイベントなどのイベントをダウンサイジングするかたちで開催し、企画にあたっては、プロジェクトメンバーと協働しながら進めた。そのほか、事業の成果や進捗を発表するイベントなども開催した。

例 中園町で逢いましょう

本事業ならびに旧金子邸の状況を報告するイベント。資料展示やパフォーマンスイベントなどのほか、実際の改修作業もイベント中に実施した。オープンハウスのイベントのため、この建物に古くから関心のあった地域住民などが多く訪れた。



例 中園町ミートアップ

日本各地でイベントやスペースなど、オルタナティブな「場」を提供する人々をゲストに迎え、その運営にまつわる様々なトピックについて、参加者とディスカッションを行うイベント。オルタナティブスペースの運用の researched、参加者同士のコミュニティ意識の醸成にも寄与した。令和4年度1月末までに30回開催し、県内外からも多くの参加者があった。

例 中園町サイレントハーモニー

ヘッドフォンで演奏者による即興的な演奏を楽しむタイプのコンサート。令和4年度1月末までに9回開催し、県内外からも多くの参加者があった。改築 / 減築の最中、各演者が空間を読み取りパフォーマンスに取り込むことでサイトスペシフィック性が強い公演。

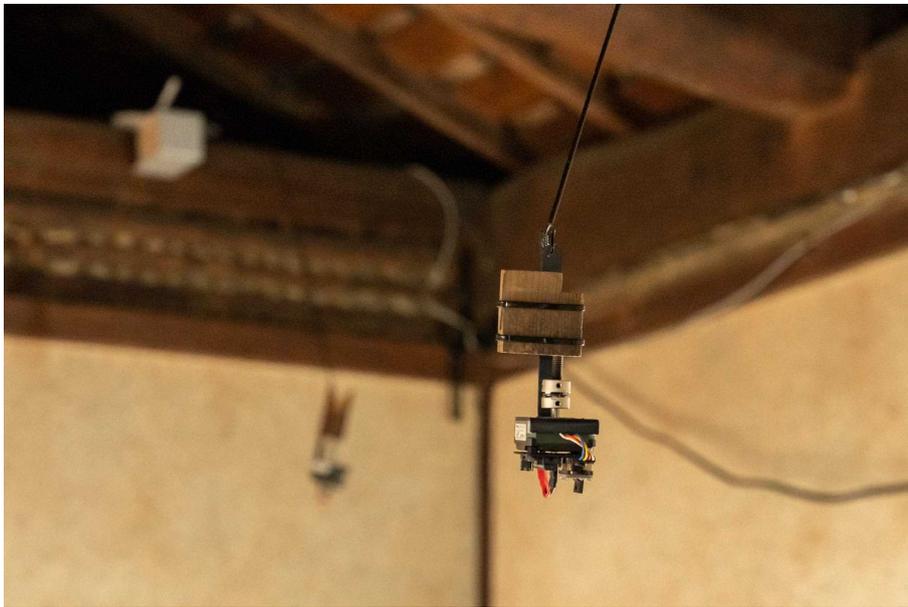
例 映像を通じて空間を考える

コミュニティや空間をテーマとした映像作品を上映する上映会。国内外の配給会社と協力して、日本国内では上映の機会が少なかった3作品を上映した。鑑賞後、作品を振り返りつつ参加者同士で地域社会や空間にまつわるディスカッションも実施した。



例 想像上の修辞法

国内外で活躍するアーティスト三原聡一郎によるサウンドインスタレーションの展覧会。バードコールと呼ばれる鳥の鳴き声を模倣する装置をコンピューター制御した作品で、空間内に鳥の鳴き声のようなものが時折こだまする。素材には改修ででた廃材を使用した。改築 / 減築工事が進む建物内に展示し、工事の進捗と合わせて作品の見え方が変化する。プロジェクトメンバーによるギャラリートークも実施。



例 Remeetupin『カタシロ』

ゲストの出演者と進行役が対話をしながらその場でストーリーを紡いでいく即興演劇の公演。会場が活用物件内の居間と床の間ということもあり、押し入れや縁側を舞台装置に取り込むことで空間的特徴を生かした公演となった。プロジェクトメンバーに、テーブルトークRPGに造詣が深い人物がおり、それを原作とした改変可能な演劇作品を、原作者と交渉して上演した。



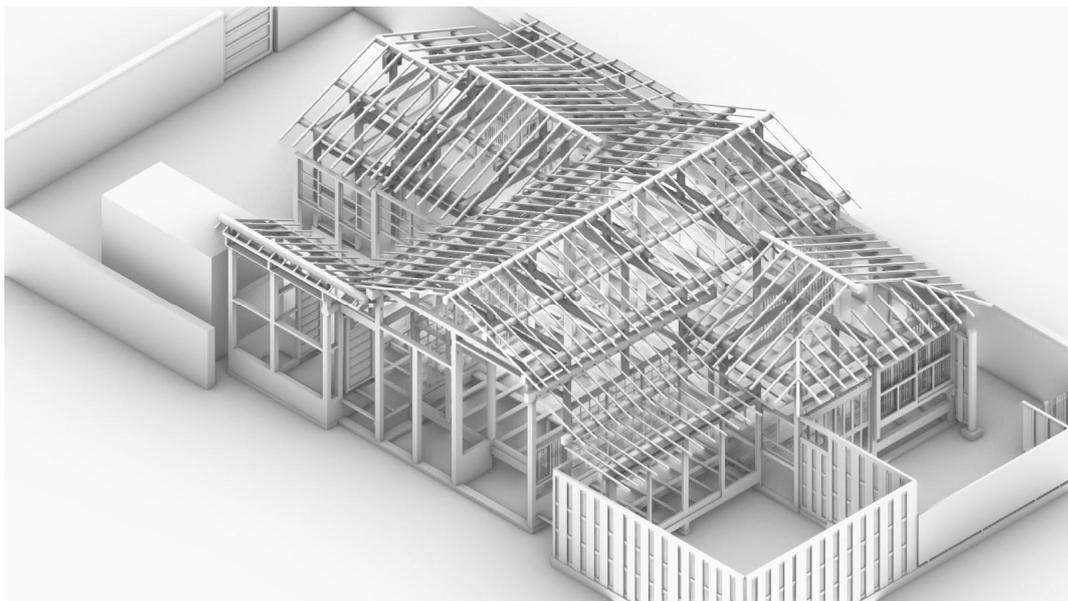
例 未来の中園町の運動会

家の中で楽しめるスポーツを新たにつくり、それを実施するスポーツイベントを開催した。「未来の運動会」は国内外で多数開催されており、その最も小規模なバージョンとなる。プロジェクトメンバーのひとりに「未来の運動会」をはじめとする、スポーツに「共創」を取り入れたイベントに関心を持った人物がおり、建物の状況を共創の一要素に組み込んだイベントとして本イベントを開催した。



建築と活動のアーカイブ

3Dデータの作成



建物を計測し、詳細な3Dデータを作成した。目にみえる部分だけではなく、改築の過程で露わになる天井裏や床下などの内部空間も計測をおこない改築/減築を行うことで、外観から把握することができなかった部材が顕になった。

改築/減築工事は主に重機は使用せず、手作業で行い、各部材の保存に努めることで、外見に止まらない、壁面の内部や屋根裏の構造など、より詳細な3Dモデルを作成することが可能になっている。そのため、金子邸建設当時の建築技術や社会経済状況など復元的に考察することができる資料となった。



古材廃材の保管

解体で出た古材は、そのほとんどが倉庫にて保管している。今後、より詳細な建物の調査を行う際に使用するほか、古材を活かしたプロダクトの作成などに使用する予定である。

ノウハウの共有

イベントレポートの作成

開催したイベントの多くはレポートを作成し、noteや山口情報芸術センター [YCAM] がパートナーシップを結ぶアート系メディアで公開した。これにより、イベントに来場することができなかった人々、プロジェクトに関心を持つ潜在的なステークホルダーの掘り起こしに繋がった。

アートプロジェクト「meet the artist 2022：メディアとしての空間をつくる」を実施します

市民をはじめとするプロジェクトメンバーが中心となり1年間にわたり、クリエイティブな活動をおこなうアートプロジェクトのシリーズ「meet the artist（ミート・ジ・アーティスト）」の最新弾として、「meet the artist 2022：メディアとしての空間をつくる」を実施することになりました。



プロジェクトの会場となる山口市内の民家

撮影：新藤弘

これまでのシリーズにおいては、写真や映像、コミュニケーションといった「市民メディア」を扱ってきましたが、今回のテーマは「空間」です。会場にも高いレベルの空き家率を誇る山口市をフィールドに、空き家を解体/改修しながら、ごく小規模なイベントスペースに転換。そしてYCAMがこれまで培ってきた公演や展覧会などのイベント制作ノウハウや、クリエイターとのネットワークを駆使して、多種多様なイベントを実施していきます。

空き家を活用して一時的に文化施設を創出するこのプロジェクトを通じて、コロナ禍以降の文化施設、さらには「場」の意義を市民とともに再考するとともに、空き家の新たな活用モデルを提示します。5月14日にはオンラインで説明会も開催予定です。この機会にぜひご参加ください。さっそく参加をご希望される方はYCAMまでご連絡ください。

2022年4月1日 山口情報芸術センター [YCAM]



関連記事

関連記事はありません。

ウェブサイトの作成と更新

山口情報芸術センター [YCAM] のウェブサイトを改修し、プロジェクトの情報を発信できるようにした。これとSNSおよび会場のサインなどを組み合わせることで、フライヤーなどの印刷物を用いなくても集客を実現できるようにした。また、すでにあるインフラ/プラットフォームを活用することで、全国的な情報発信を可能にした。



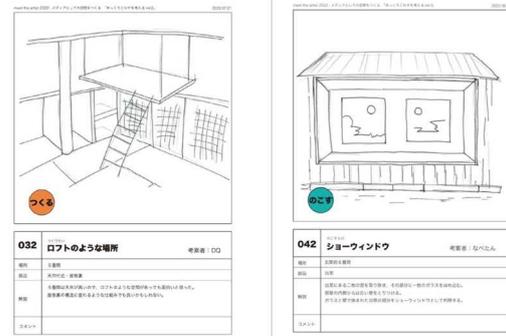
記録映像とマニュアルの作成

本事業の記録映像と一部ノウハウをまとめたマニュアル（記録集）を作成した。記録映像は本事業における日常的な営みからイベントまでをほぼ網羅しており、合計で4時間以上にもなる。こうした映像を随時公開することで、プロジェクトには関心を持つけれども遠隔地に居住しており参加できない層に向けて情報発信ができたほか、プロジェクトメンバー間の相互交流にも繋がった。マニュアルは山口市内の空き家の概況の調査など、物件探しの段階から得られたノウハウを簡潔にまとめたもので、レポートや図面なども掲載している。山口市内でアートやデザインなどのクリエイティブな分野を軸に空き家を利活用したいと検討している団体向けにプレゼンテーションに使用し、情報共有や山口市周辺の今後の空き家の利活用の促進に繋がった。



記録映像

meet the artist 2022
メディアとしての空間をつくる
空き家活用マニュアル



マニュアルの一部

3 . 評価と課題

不動産的価値の向上

「古屋付き売土地」は査定を終えて市場に出回ったとしても、長期に渡って買手が付かず空き家化してしまう。しかし、この建物の中には不動産としての価値がないだけで実際には使えるものであったり、住宅としては使えないが、別の用途として利用できるものがある。

本事業においては、オルタナティブスペースとして整備する際に設備機能を一部改修することで、地域における交流拠点を創出すると同時に物件の不動産的価値の向上を目指した。さらに事業の一連の調査結果、改修作業やイベント活動をアートプロジェクトの様に**様々**なメディアを使ってドキュメンテーションを行うことで、不動産市場にとどまらない分野へアウトリーチ活動に努めた。一方で、エリアとして本事業を通じて新たな価値創造に繋がったかは明らかにしにくく、今後も継続的に活動を続けていくことで分析を行って行きたい。

契約書の作成

物件を貸主から借用する場合、借主には建物の原状回復の義務が生じることが多い。本事業は、特記事項において貸主との承諾書と併せて取り交わす合意書に記載された規定において、借主負担で解体も視野にいれば大幅な改築 / 減築工事を行うことを可能とする契約書を作成した。今後、本事業契約書の雛形をオープンソースとして公開する予定である。

一方で、借主が途中での工事の中止・契約を放棄することになった場合、再び貸主が「古屋付き土地」を保有することになったり、再び何も改築、活動が行われないうま貸主に返却される場合もあるため、他事業においては貸主と借主との間で最低限の基準を設ける協議が必要となる。

プロジェクトメンバーの育成とその効果

本事業主は約60名以上のプロジェクトメンバーといわれる、本スペースを運営しながらイベントを企画制作する組織を形成され、空き家を活用するノウハウを共有することができ、それを運営するメンバーを育成することができた。さらに、普段山口情報芸術センター [YCAM] を使用する人の実践的な活動の場として提供することができた。

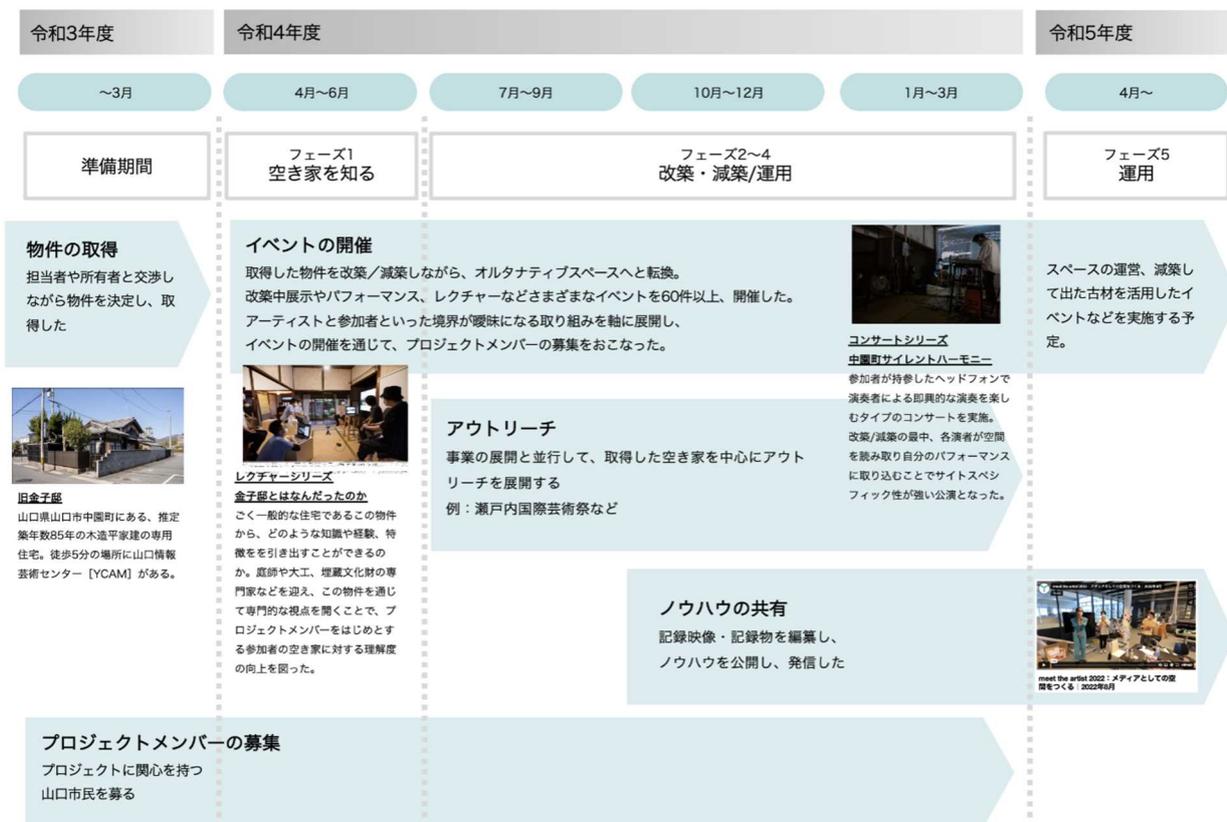
プロジェクトメンバーは基本的に本事業に関心がある山口市民で構成されており、ほとんどのイベントやスペース運営はそこで賄われた。一方で、本メンバーの周辺に存在する事業に興味があるが他地域に住んでいるなどの理由により参加できない、イベントビューワーのような存在に対しての関わり合いの方法をさらに検討する必要があった。

公共文化施設がオルタナティブスペースを運営するモデル

地方公共文化施設が、住居として機能しない建物の他用途転用可能性を明示し、それを運営するモデルを作成した。プロジェクトメンバーを組織し、積極的に運営をになってもらうことで運営組織の重心が変化し、企画制作やスペース運営におけるコストをカットすることができた。一方で、母体となる地方公共施設とオルタナティブスペースとの物理的近接性や、それが持つリソースにより機能が制限される場合もある。

4 . 今後の展開

事業の展開



継続的なスペース運営

スペース運営、イベント企画・運営において、積極的にプロジェクトメンバーの登用を図ることで、実施主体の本事業の事業主が離れた想定においても、継続的な運営が見込まれ、活動する場所に関しても、イベントを実施できる最低限度の機能を残す。さらにプロジェクトメンバーは山口市内に満遍なく存在し、このスペースに限らない活動の継続も見込まれる。来年度においては、改築/減築によって出た古材を活用したワークショップや、本プロジェクトに興味がある人以外にもリーチしていくような企画を検討中である。

改築 / 減築で出た素材を活用した活動

物件の庭に生えていた樹木を活用して、カトラリーや小物にリメイクする。プロジェクトメンバーに木工雑貨の制作をバックボーンに持つ方がおり、その方を講師として行う予定。



改築/減築作業で出た古材などを移動式の屋台としてアップサイクルするプロジェクト。場所に固定されていたプロジェクトメンバーの活動を、移動式の屋台をハブとしてまちなかに浸透させていく目的がある。

成果報告会/展覧会

本プロジェクトのドキュメンテーションやあらゆるイベント活動で作成された制作物を発表する成果報告会/展覧会を山口市内(場所に関しては未定)で開催する予定である。これを通じ、本プロジェクトに興味がある人にとどまらない、市民など多くの人に本事業ひいては、本事業で生み出されたノウハウを共有する機会とする。

山口市内でのノウハウの展開

本事業において、空き家対策に文化振興の視点を与えることで新たな空き家活用の事例を作ることができた。

本事業地にほど近い山口市中心市街地においては、商店街を中心に多くの商店や飲食店が並び、金融機関など山口市の都市的機能が集積したエリアである。市街地内には、「空家」「空き地」が多く見られ適切な建物更新ができない状況である。現在、山口市中心市街地活性化推進室や地元企業が、アートやデザインなどのクリエイティブな取り組みを軸に、中心市街地の空き店舗・空き家に対する利活用を進めていく動きが見られ、こうした動きと連動しながら、本プロジェクトのノウハウを転用することを視野に入れている。

| ■事業主体概要・担当者名 | | | |
|--------------|------------------------------|--------------|--------------|
| 設立時期 | 1996年 | | |
| 代表者名 | 山口市文化振興財団 理事長 中野勉 | | |
| 連絡先担当者名 | 山口情報芸術センター [YCAM] 学芸普及課 渡邊朋也 | | |
| 連絡先 | 住所 | 〒753-0075 | 山口県山口市中園町7-7 |
| | 電話 | 083-901-2222 | |

| | | |
|--------|-----|------------------------|
| | メール | watanabetomoya@ycam.jp |
| ホームページ | | www.ycam.jp |

※事業に関してご質問等がある場合は、上記連絡先にご連絡ください。